

# 分科会Ⅵ

10月17日（木） 9：00～12：01 / ランA

---

**座長** 有限会社ウェルフェア 代表取締役 田邊 恒一 氏

**座長** 社会福祉法人人口和福社会 グループホーム口和 部長 田端 隆士 氏

テーマ「GHケア・認知症ケア・自己決定支援・  
重度化防止 等」

時間	演題 / 副題	所 属	発表者 (都道府県)
9:00 }	自宅を離れ、施設へ入居すること 認知症の人の本当のしんどさ	グループホーム ゆい	田中 義規 (滋賀県)
9:14 }	これからの私の暮らし これからも楽しく生活して“生きたい”	グループホーム つどいの家・桜町	田辺 大 (新潟県)
9:28 }	疾患があってもその人らしい生活を 残存機能を出来る限り維持するために	グループホーム 宝塚あいわ苑	山田真紗巳 (兵庫県)
9:42 }	毎日の運動で転倒予防！ I様の元気の秘訣	グループホーム 第2グレイスフル春日井	辻 法子 (愛知県)
9:56 }	続いていく日常 散歩で紡ぐ生活のカタチ	グループホーム らんまん高殿	高橋真梨恵 (大阪府)
10:10 }	T様の11年間のまんてん生活を通してこれからわたしに出来ること 長期間の利用で得られる安心と信頼	グループホーム まんてん高月	西山 員広 (滋賀県)
<b>10:24～ 休 憩</b>			
10:38 }	居心地の良い場所に A様の歩く理由	グループホーム グレイスフル箕輪	木下 彰久 (長野県)
10:52 }	おやつ作りが認知症高齢者のQOL向上に及ぼす効果 料理療法を行って	グループホーム やすらぎの家	福田 美穂 (島根県)
11:06 }	トロミの濃度・温度による味・食感の変化	多機能地域ケアホーム ありがとうグループホーム	國峯 加奈 (広島県)
11:20 }	食の多様性を考えた献立と調理の工夫 ～認知症予防を目指した食事～	グループホーム ジョイフル江南	橋本 順子 (愛知県)
11:34 }	嚥下低下の合併症状別による食事形態変更 GHご利用者での紹介	多機能地域ケアホーム ありがとう グループホーム	亀本 桂子 (広島県)
11:48 }	食事のすばらしさをもう一度取り戻す為の取り組み 認知症による食欲低下への取り組み	グループホームふれあい明石	竹本 修平 (兵庫県)
<b>総 評</b>			

# 自宅を離れ、施設へ入居ということ

## ◆キーワード

- 1 認知症ケア
- 2 パーソンセンタードケア
- 3 自己決定支援

認知症の人の本当のしんどさ

滋賀県・守山市

しゃかいふくしほうじん じえいかい

社会福祉法人 慈恵会 グループホームゆい

たなか よしのり  
管理者：田中 義規

たけむら はるか  
共同研究者：竹村 春香

平成7年4月に全国8番目のグループホームとして定員6名で開設。平成21年1月より、木造平屋建ての建物で新築移転し、9人2ユニットへ増床

共に支え合って暮らしながら、一人ひとりの持てる力を活かし、可能な限りその人らしい生活を継続していただけるよう支援します。

(取り組んだ課題・はじめに)  
ケアマネジャーより、独居での生活が難しくなっているNさんについて、グループホームゆいへの入居の相談を受ける。

ご本人の状況は、要介護2、認知症自立度はⅢa。夫が他界し、一軒家に一人暮らし。隣町に住んでいる一人娘や、遠方に住む姉妹へ一日に数十回電話を掛け、指示を仰いでいるが、自分の意にそぐわないと、感情的になり、娘・妹を責めたてる。特に娘には強烈な暴言があり、近親者の支援を受けることができない。料理はできるが、火の管理ができない。買い物へ出掛ける事ができるが、同じものを繰り返し購入し偏った食生活になっており、独居での生活が限界にきていると情報を受けていた。

デイサービスが利用できない、自宅へのこだわりが強い方がグループホームで生活できるまでの取組みを報告する。

## (倫理的配慮)

ご家族に対し、本発表の趣旨について説明し、同意を得ている。

## (具体的な取り組み)

「帰りたい」という言葉が繰り返される事は想定の上で、「不安」「楽しみ」「しんどさ」等、様々な想いに気付けるよう、話される言葉と表情の変化に注目して関わってきた。この中で、帰りたい思いが強くなると、建物中に声が響くほどの大声で「何で帰りたいと言っているのに、送ってくれへんの!」「タクシーで帰る!」といい放ち、建物から外へ出ていく。ご本人がすぐに送ってもらえないと思われると、興奮状態になった。ご本人の「帰りたい」訴えが出ると、興奮状態になるまでに「自宅へ送る」事から開始。職員は、「自分の話を聞いてくれる人」と認識してもらえらるまで忍耐強く関わる。

一度興奮すると、暴言が止まらないため、認知症専門医の受診に職員が同伴し、日常生活の状況を詳細に伝えた。薬の服用について相談した結果、定期で

服用していた精神安定剤が、興奮状態がみられるときにのみ服用することになった。

## (活動の成果と評価)

利用開始日の強い拒否。自分がどこへ行き、どうなるのか?わからない所へ行くことは、誰でも不安。この不安を解消するため、職員との関係作りから開始。職員が自宅へ訪問、ご本人の話を聴く事に徹した。出会って4日目に、グループホームへ来所できた。しかし、夕方には「帰る」と訴え興奮状態に。ご本人の言葉に合わせ、グループホームと自宅の往來を繰り返した。毎月のユニット会議でひもときシートに加え、度々の立ち会議で、ご本人の言動の背景を考え、言葉に対応するのではなく「思い」に対応してきた。様々な出来事を繰り返し、利用から2か月目辺りから宿泊日数が伸び始めた。この頃には、「娘は私をここへ入れたら安心なのだろう。でも、私は自分の家でゆっくり過ごしたい。それを言いたいだけなのに、娘は聞いてくれない」「姉妹は3人で住んでいるのに、私だけ1人」と心の内を職員へ打ち明けるようになった。また、「ここは安心して過ごせるいい所。」と笑顔で話されるようになった。Nさんの訴えを受け止め、思いの実現を続ける中で、職員を受け入れて下さるようになると同時に、宿泊日数が伸びた。

## (今後の課題・考察・まとめ)

今後、認知症の独居高齢者のケースが増えていくと考えられる。認知症により、上手く伝えることができない場合でも、ご本人が話される『言葉』には、その人の『思い』がある。『思い』の背景に目を向け、思いに寄り添った対応をすることで、これまで以上に『その人を知る』ことができると考える。

「ご本人の思いを知る」ことを最優先に、自宅を離れても安心して過ごせる暮らし作りを展開していきたい。

## これからの私の暮らし

## ◆キーワード

- 1 これからの生活
- 2 事業所の取り組み
- 3 本人の望み

これからも楽しく生活して“生きたい”

新潟県・燕市

しゃかいふくしほうじんさくらのさとふくしかい いえ さくらまち  
 社会福祉法人桜井の里福祉会 グループホームつどいの家・桜町

リーダー たなべ だい

発表者：リーダー 田辺 大

平成 27 年 3 月開設 小規模多機能ホーム併設  
 2 ユニット定員 18 名  
 平成 28 年 8 月 共用型デイサービス定員 6 名

「住み慣れた地域でいつまでも暮らしたい」を支援いたします。を基本理念とし、お一人おひとりのこれまでとこれからの暮らしを大切にしていこう支援しています。

(取り組んだ課題・はじめに)

A様 72歳 女性 要介護1 19歳で上京され、県外で生活されていた。令和5年の夏に姪様が様子を見に行くと熱中症で倒れている所を発見される。3年ほど前から姪様より生活の様子で気になる事があると言われていたこともあり、この件から地元に戻り兄夫婦と同居することとなる。当法人の通所介護、小規模多機能型居宅介護でのサービス利用を経て当事業所へ入居となる。数カ月間で今までの生活環境が大きく変わり、実家の土地との認識はあるも長く暮らしていた県外の状況とが混在しており、指示や確認など生活全般での支援が必要になっていた。今までの生活からの変化、これからの生活についての不安の解消をはかり、A様らしさを発揮して、楽しく生活をしていくためにユニット単位ではなく、事業所全体としての関り、実践したことについて報告する。

(倫理的配慮)

今回の発表についての、資料・写真等は、ご本人・ご家族、その他関係者の了解をいただいている。

(具体的な取り組み)

通所介護、小規模多機能型居宅介護を利用している時から洗い物やたたみ物などをA様に行ってもらっていた。ユニットが変わることでA様への関り方が変わらない様に事業所全体を通してケアの方法を統一し、A様に混乱が無い様に行った。サービス利用を通してその他入居の方や、職員との交流を積極的にされており、同時にそれを求めているような様子も見られた。そこで法人で行なっている地域食堂の運営にかかわるお手伝いをお願いする事とした。本人は「私にできるかな？」と不安を感じられていたが「私たちも一緒に行きますし、もしわからないことがあっても一緒にやってみましょう」と伝え前向きに考えて下さり、一度参加してみる事となる。実際運営が始まると、接客業をされていた経験からなのかキビキビと動いて下さり、コミュニケーション

ンもA様なりに取られ、楽しまれている様子も見られていた。終えた後はA様も「疲れた、やっと終わった。」と言われていたが充実した様子もうかがえた。

(活動の成果と評価)

洗い物やたたみ物などは入居前から続けて頂いていたこともあり、入居されてからも積極的にしてくださいました。洗い物に関しては入居ユニットだけでなく、利用されていた小規模多機能型居宅介護のほうへも顔を出され「洗い物手伝いに来たよ。」とA様から職員へ声をかけられる様になった。その他にも洗濯物干し、たたみ物なども積極的にご本人から「これ干したらいいの?」「これたたんでいいの?」と声を掛けられる様になり、時には他入居者に声を掛け一緒にして下さっている。地域食堂の運営に関するお手伝いに関しても最初の不安感の解消をはかり、こちらから指示することでA様も積極的に動いて下さり他の方との交流や来てくれた子供たちの姿を見て和やかな表情も見られていた。「これからもお手伝いお願いできますか」に「簡単な事しかできないけど、それでもいいならね。」とこれからのことについても前向きに考えて下さっている様子だった。

(今後の課題、考察、まとめ)

A様のように年も若く、身体も元気な方と関わる中でユニットのみで考えていくには、生活していくうえで閉塞感が出てくるのではないかと考えた。事業所全体で生活を支えていくことでより楽しく、より本人らしく生活して行けるのではないかと思います今回の実践を行った。A様に「窮屈な事はないですか?」と伺った際に「んー特に無いかな」と返事をされた。本当にその時は「特にない」と考えられたかもしれないが、生活の中で楽しみ、やりがいを見出しA様らしさを発揮してこれからの生活や望みにもつながって行きたいと思う。また、今後は、希薄となっている地域もA様にとって関りを持てる事があると考えつながりを一緒に考えて行きたいと思う。

## 疾患があってもその人らしい生活を

## ◆キーワード

- 1 グループホームケア
- 2 その人らしさ
- 3 重度化防止

残存機能を出来る限り維持するために

兵庫県・宝塚市

グループホーム 宝塚あいわ苑

たからづかあいわえん

やまだ まさみ  
発表者：山田 真紗巳

認知症対応型通所介護、小規模多機能型居宅介護と併設している 9 名×2 ユニットの定員 18 名認知症対応型共同生活介護

平均介護度：3.67 認知症自立度Ⅱa 以上：18 名  
看取り件数：2～3 件/年

## (取り組んだ課題・はじめに)

高齢者を支援する上で、個性と生活リズムを尊重することが大切であり、施設入居後も、入居前の生活動作を継続して行うことが重要である。A氏は、体を動かすことは好きだが、控えめな性格であり「体を動かしたい」と思っているが、自分から職員に声をかけづらくされていることや、どのように伝えたらいいのかわからなくされている様子がある。「体を動かしたい」というA氏の思いを実現するために活動した事例を紹介する。

## (倫理的配慮)

目的及び方法について、本人・家族に説明し、協力の意思を十分に確認するとともに、この協力は強制でない旨伝えた。発表時は匿名であり個人を特定できるものではないこと、得た情報は研究以外に使用しないことも説明し、十分な同意を得た。

## (具体的な取り組み)

【事例】A氏 92歳 女性 要介護2

生活自立度 B2 認知症度 IIIa

既往歴：大腿部軟部肉腫 大動脈狭窄症

【取り組み期間】2023年6月22日～2023年8月20日

## 【内容】

7時から18時の過ごし方を2週間調査した。結果、居室で過ごす時間よりフロアで過ごす時間が長く、コミュニケーションを図るわけでもなく席についていることやTVを見ていることが多かった。このことから、余暇時間の充実を図るため、まず、『認知機能の維持』を目的として医師を含めたカンファレンスを行い、「本人が自力で出来ることを増やしリハビリを通して心と体を刺激することが重要」との結論から、食後のお盆拭きや洗濯物干し、洗濯たたみなど生活の中で出来る家事を取り入れた。次に、『個別リハビリテーションの提供（以下、個別リハ）』を目的としてPTを含めたカンファレンスを行い、立位保持・踵上げ訓練・膝関節屈伸訓練・歩行訓練を計画した。これらのことを実行するために、1日のタイ

ムスケジュールを本人と話し合い、スケジュール表を作成し、居室とテーブルに掲示し、一緒に取り組んだ。

## (活動の成果と評価)

個別リハについて、訓練内容は覚えてはいたが、足を動かすことができないとの思い込みから、はじめは足を動かそうとしなかった。その後、毎日リハビリに取り組むことで徐々に足を動かせるようになり、負担が生じない程度の実施回数としていたが、「まだ出来るよ」と笑顔で話されることが多くなり意欲的に取り組むようになった。家事では職員のお手伝いをお願いしますか？」の声掛けに対し、はじめは戸惑っていたが、職員見守りのもとお盆拭きに取り組むことができ、その後は、自らスケジュール表で時間を確認し、洗濯干し、洗濯たたみなどできるようになり、他者との交流も増え、互いに声をかけあい、家事を分担して積極的に取り組めた。

## (今後の課題・考察・まとめ)

個性と生活リズムを尊重するには、本人の困難さを出来る限り解消する様心掛ける事である。そのためには、介護者が本人の生活の困難さを理解し、困難さに働きかけていくことが重要になる。A氏の思いを傾聴し不安を共感したことで、信頼関係を築くことができ円滑な計画の実施に繋がったと考える。タイムスケジュールを作成・可視化したことでA氏が自ら考え行動する動機付けに繋がった。また、職員が繰り返し一緒に行うことにより安心して取り組むことができ、「自分にもできる」という自己肯定感と意欲の向上に繋がったと考えられる。介護者がその方に合わせた適切な支援を行なうことで、疾患があってもその人らしい生活を継続できることが実感できた。今後も個性と生活リズムを尊重したその人らしい生活スタイルを確立することで利用者へ寄り添った介護を提供したい。

## (参考・文献など)

認知症介護実践者研修標準テキスト

## 毎日の運動で転倒予防！

## ◆キーワード

- 1 有酸素運動と筋トレ
- 2 毎日毎日コツコツと
- 3 100歳目指して…

## I様の元気の秘訣

愛知県・春日井市

グループホーム 第2 グレイスフル春日井

発表者： つじ のりこ  
辻 法子共同研究者： ぐるーぷほーむ しょくいんいちどう  
グループホーム 職員一同

第2 グレイスフル春日井は平成14年8月に春日井市牛山町に開設されました。グループホームは1ユニットです。

1ユニット9名の事業所で現在女性9名。平均介護度は1.56。平均年齢は84.6歳です。

## (取り組んだ課題・はじめに)

最高齢でユニット内では居室からフロアの席まで一番遠く、転倒リスクが一番高い方だと判断し今後も転倒しない様I様の日常に着目した。

I様は腰からほぼ90度曲がっており杖を使用して歩行されている。

アルツハイマー型認知症であるが、高齢であることやご家族の意向もあり薬物療法は行っていない。同じ話をいつも何度もされるが、入居時から顕著な認知症の進行はみられない。天気の良い日はベランダを歩くことが日課となっている。加齢に伴い歩く際に息が荒くなることもあり、ベランダを一人で歩くことは少なくなった。食事や着替えは自立しておりトイレにはご自分で行かれ、紙パンツにパットを使用している。最近はトイレに間に合わず尿失禁してしまうこともある。リビングに最も遠い居室であり、布団を整えたり、うがいをしたりと毎日何往復もされていますがこの状態を少しでも長く続けていただけるよう支援した成果を報告する事した。

## (具体的な取り組み)

- ①毎日の有酸素運動は、まずウォーキングから始まり、365歩のマーチに合わせて廊下やベランダを歩く。5分程で1曲が終わりご自分の席に戻って頂く。
  - ②ビデオを観ながらNHKのみんなの体操（ラジオ体操）を行う。
  - ③ボール体操は突起のあるゴムボールを両手に持つてつぶす、頭の上に上げる、左右に腰を回す、足首に挟んで足を上げる体操を行う。
  - ④セラバンドを使用した体操を上下肢行う。
- 上記内容については、午後も同じメニューを行っている。

## (活動の成果と評価)

I様は体操やウォーキングは真面目に取り組む方だがトイレに行かれると時間がかかるため、体操の開始時間に間に合わない事が時々ある。

このことから職員は、朝の挨拶から日付の確認や今日は何の日等の話題でできる限りI様が参加できるようにした。

また、散歩や外出行事を企画し、歩く意欲が継続するように支援した。

I様は杖を使用しているにもかかわらず手摺を掴むことが多くなってきたため、歩行器を試したことがある。

理由としては、杖だけでは不安定でバランスが悪く転倒する危険があることや手すりを掴み損ねて転倒するリスクが高いと判断したためである。

試した結果として、長年杖を使用しており歩行器を使用している時も「杖はどこいった」と杖が気になって仕方がない様子で、杖に執着し、より不安定になった事があり数日で歩行器の使用は中止した。

## (まとめ)

I様の体操への参加率が上がった為、尿失禁も減ってきた。また、体を動かすことで毎回食事を美味しく食べる事ができ、I様の口癖は「こんなに美味しいもの食って200歳まで生きれるわ。ばんざ〜い」です。改めて毎日コツコツ積み重ねることの重要性を実感しました。

100歳目指して少しでも長く自力で杖歩行ができるよう、今後も有酸素運動を毎日毎日コツコツと続けられる支援を継続して行く。

## ◆キーワード

- 1 認知症ケア
- 2 フレイル予防
- 3 自己決定支援

## 散歩で紡ぐ生活のカタチ

大阪府・旭区

たかどの  
グループホーム らんまん高殿

たかどのしょくいん

発表者：高橋 真梨恵

共同研究者：グループホームらんまん高殿職員

認知症対応型共同生活介護

令和4年5月1日 開所

3ユニット 定員27名

運営理念：のんびり ゆったり ほがらかに。

いつまでも自分らしい生活のお手伝い。

## (取り組んだ課題・はじめに)

ON様は今年3月の入所後から屋内の歩行は手すりや壁のもたれながらの歩行であった。「また外歩きたいなあ。」と懐かしまれる事があった。

○入所前に屋外で転倒し骨折した経緯から、歩行に不安を感じていた。

○体操では上肢だけを動かすのみ、生活の中で手伝いたい事はあるが移動に対する不安の気持ちが強く遠慮していた。

○昔から話好きで他者に関する事が楽しみであった。下肢の不安が解消出来れば、他者との関りも増え、本氏の生活がより良いものになるのではないか。以上から下肢筋力強化のニーズに添って、体操よりも日常的なものに近い散歩で取り組んでみようと考えた。

## (倫理的配慮)

取り組みに際しては、協力は任意であること、協力しないことによる不利益はないこと、協力の同意は途中で取り消すことができることを説明しました。また、日本認知症グループホーム全国大会で発表することを説明し、書面にて同意を得ました。写真や動画の掲載についても同意を得ました。

## (具体的な取り組み)

1. 下肢筋力強化という固い言葉と姿勢ではN様も身構える。今までの生活の中で馴染みやすい言葉に変換し前向きに参加と行動が出来るような声かけを行う。
2. 屋外歩行のアセスメントをより詳しく取り、どうすれば安全に散歩が行えるかの検討。アセスメント結果を反映し散歩を行った。散歩中「横で支えるから大丈夫ですよ。」といった安心感を与える声かけを行った。
3. 散歩をやらされていると思わないようにリラックス出来る声かけ。散歩終了時に労いの声かけを行った。

## (活動の成果と評価)

1. 「今日は散歩行かへんの？行こ！」と自身から積極的に散歩参加への意思表示をされるまでに至った。下肢筋力の維持向上が普段の生活の中に無理なく組み込まれ行えている。
2. 継続して散歩を行った事で下肢筋力が向上し歩行が安定してきた。屋内では壁や手すりにもたれながらの歩行が無くなり歩行出来る距離も増えた。
3. 散歩時の声かけをこまめに行った事で、散歩への安心感と役割を感じられるようになった。日常生活の中で他にも役割が無いかを意欲的に探され、他利用者様や職員と良い関係が築ききっかけになった。

## (今後の課題・考察・まとめ)

下肢筋力の強化で歩行が安定し、安心して散歩が楽しめるようになった。楽しみが増えた事で日々の生活にハリが出て、普段も前向きな姿勢がみられるようになった。遠慮がちであった他者との関りも増え、自身から周りに積極的に関わるようになった。グループホームの中で役割や生活の楽しみを見つけ、本来の意味で共同生活の場の一員となったと考えられる。散歩がN様の生活の一部となった事がより良い生活の質の向上に繋がった。生活の一部を散歩が紡いだ結果と考える。今後もN様の想いに寄り添いながら、N様の人生に関わる一員として、より良い生活を送れるように支援をしていきたい。

## (参考・文献など)

『これでわかる認知症予防』成美堂出版  
監修 石井映幸 発行者 深見 公子

『認知症対応共同生活介護施設（グループホーム）における散歩の実施状況と影響』日本デザイン学会第68回研究発表大会

著者 河西 大介 山本早里

[ja\(jst.go.jp\)](http://ja.jst.go.jp)

## T様の11年間のまんてん生活を通してこれからわたしに出来ること

## ◆キーワード

- 1 継続支援
- 2 長期利用
- 3 自立支援

長期間の利用で得られる安心と信頼

滋賀県・長浜市

グループホーム まんてん高月

たかつき

発表者：介護職員 西山 員広

共同研究者： まんてん高月スタッフ一同

たかつき

いちどう

認知症対応型共同生活介護  
令和2年5月1日開所 定員 2ユニット 18名のんびり ゆったり ほがらかに。  
いつまでも自分らしい生活のお手伝い。

## (取り組んだ課題・はじめに)

グループホームまんてん高月は令和2年5月1日より開所。社会福祉法人まんてんは平成17年4月にまんてん塩津、平成21年にまんてん小谷を開設していて、ご利用者の状況に応じた継続的なサービスの提供を目指している。T様は平成24年からまんてん小谷の小規模多機能を利用され、地域や友人に支えられながら在宅での生活を続けてこられたが、認知症の進行とともに家での生活が難しくなり、まんてん高月の開設に合わせてグループホームに入所された。入所しても家での生活と変わらない日常を送っていただけよう支援を続け、令和5年10月に施設で亡くなられた。わたしは、T様にその時々で提供してきたサービスや、ご家族との関わりを振り返ることで、今後に繋げていきたいと考えた結果を報告する。

## (倫理的配慮)

事例報告にあたり、ご家族の承諾を得る。

## (具体的な取り組み)

- ① T様に提供したサービスを振り返る  
小規模多機能を利用していた時に提供していたサービスやグループホームでの生活を、担当していたスタッフから聞き取る。
- ② T様やご家族の思いを振り返る  
普段のスタッフとのやりとりや、看取りを希望された時のご家族の思いを考える。
- ③ 長期間利用していただけた理由を考える  
長期間利用していただくことが、サービス提供の面でメリットがあると仮定し、なぜ、11年間サービスが提供できたか、普段現場で働くわたしに何が出来るかを考える。

## (活動の成果と評価)

- ① 平成24年～令和2年 小規模多機能  
通いで利用が主で、施設ではレクリエーションや調理に参加されていた。近所に気にかけてくださる友人がいて、一緒にサロンや地域の行事に出掛けておられた。  
令和2年～令和5年 グループホーム  
在宅や小規模多機能利用時に調理が得意だったことから、調理を中心に家事に取り組んでいただいた。全介助が必要になってからも、人付き合いが好きだったため、みんなの輪に入っていただけよう支援した。
- ② T様は顔なじみのスタッフを「兄ちゃん」と呼び慕っておられた。  
ご家族もT様が体調を崩されることが増えると「ここで最期までみてほしい」「慣れたところに居るのが一番良いと思う」と仰っていた。
- ③ 他の利用者と比べて大きな病気やけがをされなかったことが、長期間の利用につながったと考える。利用者の生活歴に沿った個別支援をおこなない、やる気を引き出すようなアプローチを意識することが大切。

## (今後の課題・考察・まとめ)

施設を移っても、同一法人内で馴染みのスタッフによるサービスの提供は、利用者やご家族にとって安心出来る。ご家族とも良好な関係を築くことで、最期まで任せていただけるようになる。現状、まんてん高月で退去された利用者の約半数が入院退去のため、自立支援を続けて活力ある生活を送っていただき、下肢筋力低下を予防して入院を減らすことが、長期利用に繋がる。

## ◆キーワード

- 1 安心できる場所
- 2 本人の思い
- 3 習慣や好み調査シート

## A 様の歩く理由

長野県箕輪町

ぐるーぷほーむ

ぐれいすふるみのわ

グループホーム

グレイスフル箕輪

発表者：木下 彰久

共同研究者：職員一同

男性 2 名女性 16 名の入居者様が生活されている。平均年齢 89 歳、最高齢は 94 歳、平均介護度は 1.7 である。

当施設は長野県南部に位置する上伊那郡箕輪町にあり、町を展望できる場所にある。グループホームの他にデイサービスセンター、居宅介護支援事業所、ショートステイ、特別養護老人ホーム、生活支援ハウスが併設する複合施設である。

(取り組んだ課題・はじめに)  
ひとり歩きが入居理由の一つである利用者様の歩きたい理由や原因を探り、利用者様にとって居心地の良い場所となることを課題として取り組んだ。

(倫理的配慮)  
発表にあたり、個人が特定できないよう配慮し、ご本人・ご家族に了承を得た。

(具体的な取り組み)  
A 様：R4 年入居、84 歳/女性/要介護 1/障害高齢者の日常自立度 J2/認知症高齢者の日常生活自立度 IIIa/MMSE 5 点 (入居時は 16 点)

入居当時は「私これから帰りますね」と帰りたい思いが強く、施設内を早足で歩きまわり、玄関を探して GH 内の全部の扉を開けていた。行動を抑制することなく、場面転換をはかり、施設周辺を一緒に歩くことで気持ちを発散していただいていた。

入居より 2 年余りが過ぎると表情が険しくなり、自分の想いを言葉にできなくなり、職員が散歩やごみ捨てにお誘いしても「もういいです」とフロア内を歩き回るようになり、これまで行ってきたひとり歩きに対しての対応では難しくなってきた。

そこで、A 様への関わり方を見直すため、長年なじんだ生活習慣や好み、趣味、娯楽などを知るために当法人で作成した『習慣や好み調査シート』を活用しアセスメントをした。

習慣や好み調査シートから、A 様は、専業主婦で家事についてはきれい好きで長年洗濯や掃除機をこまめにかけて掃除を行ない、炊事も家族のためにかかさず行っていた。音楽が好きで聴いたり、歌われたりしていた。

しかし、入居当時よりも認知症が進行したことにより、何とかこなせていた家事を行うことができなくなり、不安を感じている。また、2 名の入居者様から「何もしなくて良いご身分だわね」と厳しい目を向けられていたり、食事に集中することが難しく食べ終わるまでに時間がかかり入居者様がひたたく様に食器類を下げるのが頻繁となっていた。入居者様が強い態度をとる様子が恐怖感となりひとり歩きのきっかけとなっていた。

習慣や好み調査シートを用いたアセスメントの結果、認知症の進行や人的環境変化でストレスや不安を感じやすくなり、居心地の悪い生活場所になっていると考えた。①安心感や楽しみを増やすこと。②不安やストレスを減らすことを主に居心地の良い場所を作る活動をした。

①昼食後ほとんどの方が居室で午睡するためフロアには職員と A 様だけになるため、一対一で過ごす時間ができた。この時間に在宅で毎日行っていた掃除機の変わりにモップ掛けを行ったり、大好きな歌を歌ったり、新聞を読みながら回想したりできるだけ一緒に過ごすようにした。

②下膳は職員と一緒にいるなど、生活全般に職員が関わりご本人のペースで家事を行なえるようにすることで 2 名の入居者様が厳しい態度をとられることを防ぐようにした。

(活動の成果と評価)

①習慣や好み調査シートから本人の出来ることや好きなことを探し、職員と一緒にいることで安心して落ち着いて過ごせたことでひとり歩きが減り、自分の役割を持つことが出来た。

②下膳を職員と一緒にいることで、これまでできていたことが継続でき、入居者様からも厳しい態度をとられることが減り、安心して過ごせる時間が増えた。

(今後の課題・考察・まとめ)

これまでひとり歩きに対する対応をしていたが、何故ひとり歩きをするのか原因を探ることが大切である。利用者様個々に長年なじんできた生活習慣や好みがあり、職員はそれを理解することで、利用者様への関わり方や提供できることがあると分かった。現在の生活が今までなじんできた生活に近くなることで安心した生活に繋がる。共同生活ではあるが、在宅と変わらないなじみのある生活を送ることで安心できる。利用者様の生活スタイルに職員が合わせられる支援が出来るように、職員の意識改革を進めていきたい。

## おやつ作りが認知症高齢者の QOL 向上に及ぼす効果

## ◆キーワード

- 1 認知症高齢者
- 2 おやつ作り
- 3 料理療法

料理療法を行って

島根県・安来市

しゃかいいりょうほうじんしょうりんかいにんちしょうこうれいしゃぐるーぷほーむやすらぎのいえ  
社会医療法人昌林会 認知症高齢者グループホーム やすらぎの家かいごふくしし ふくだ みほ  
発表者：介護福祉士 福田 美穂ふくしまちえみ なかむらさゆり いわたあゆみ  
共同研究者：福島智恵美 中村佐由里 岩田歩美

認知症対応型共同生活介護

2ユニット定員18名 令和5年4月開設

「共に、ゆったり、たのしく」を目標に支援しています。  
当施設は、同法人の病院内なので医療連携が図られており、安全・安心した生活ができるよう支援しています。

(取り組んだ課題・はじめに)

やすらぎの家では開設以来毎月レクリエーション活動（以下レク活動）の一環としておやつ作りを行っていた。当初は、盛り付けの作業のみだったが、次第に材料を混ぜる→焼く→切る動作へと利用者の出来る事が増えてきた。また調理を行う事で日頃は見られない表情の変化が感じられた。湯川氏は、「料理活動」を行う事で高齢者にとって、やる気や自信を呼びさまし生活の質の向上に繋がると述べている。そこで今回「料理療法」を取り入れ、おやつ作りが認知症高齢者の生活の質向上に及ぼす効果を2名の利用者の変化と効果から報告する。

(倫理的配慮)

今回の研究実施にあたり対象者（ご本人とご家族）に対し研究の趣旨・参加の自由、不参加・途中棄権によって不利益が生じる事はない事、得られたデータは研究のみに使用する事について文章に記載し同意を得、当法人倫理委員会の承認を得た。

(具体的な取り組み)

1ユニット全体でのおやつ作りをする中で今回は2名の利用者の評価を行った。

対象者

A氏 男性 90歳代 要介護1

アルツハイマー型認知症 HDS-R：26点

認知症高齢者の日常生活自立度 II b

B氏 女性 90歳代 要介護1

アルツハイマー型認知症 HDS-R：24点

認知症高齢者の日常生活自立度 III a

期間：令和6年4月～

評価方法：料理療法個人評価表(以下評価表)を基に表情・意欲・集中力・発言・社会性・包丁の使用について変化を評価する。

手順

- ①昔食べたおやつと題し回想法を行い、作るおやつを決め、必要な材料・器具を話し合う。
- ②購入する材料を買い物リストに記入する。
- ③当日の午前買い物に出掛ける。
- ④職員が事前に作り方をボードに書いておく。
- ⑤利用者は分量の計量・調理・片付けをする。

⑥実食後、感想や次回作りたいおやつを話し合う。

(活動の成果と評価)

買い物には職員2名が付き添い、初回は買い物に出掛ける事に対し不安を感じておられ、店内でも職員に尋ねる事が多かった。帰苑後には「15年ぶりに行きましたわ。無事に出来て良かったですわ」と発言が聞かれた。回数を重ねるごとに自ら商品を探し、2人で相談して品物を選ばれる様子も見られた。また商品探し・チェック表記入・支払いと役割分担し「支払いの時には神経を使いますわ」と発言も聞かれた。袋詰めでは品物が潰れないようにし、買い忘れないかチェック表を再度確認していた。おやつ作りでも最初は、職員と共に作業を進める事が多かったが、回を重ねるごとに2人で話し合いながら作業され、計量や、混ぜたり焼いたりする場面でも「この位の量でいいかいね」「もう裏返してもいいかいね」等積極的な発言が聞かれた。完成した時には「こんな事が出来るとは思ってなかった」と話しながら昔の話も聞かれた。A氏はこれまでレク活動等への不参加が多く表情が冴えず発言も少なかったが、おやつ作りの計画から買い物、製作に中心的に関わる事で、以前に比べ発言が多くなり生き生きとした表情も見られるようになり、評価表の項目で表情が2→4、発言が2→3と変化が見られた。不安だった買い物にも自信が感じられるようになり、診察時には主治医におやつ作りをした事を自ら得意げに話されていた。B氏は職員の声掛けで掃除や洗濯物たたみをしていたが、今回の取り組みを行ってからは自分から「何かしましょうか」と積極的に職員に尋ねる等、評価表の項目でも社会性が2→5と変化が見られた。

(今後の課題・考察・まとめ)

今回、料理療法を取り入れた事で利用者の自信の回復に繋がったことから、今後も継続して当活動を行い、より長期的で正確な評価を行うと共に、生活の質の向上を図っていきたいと考える。

(参考・文献など)

・認知症ケアと予防に役立つ料理療法

湯川夏子編著・前田佐江子・明神千穂

## トロミの濃度・温度による味・食感の変化

## ◆キーワード

- 1 味・食感
- 2 温度による変化
- 3 認知症の方への支援

広島県 福山市

たきのうちいき

多機能地域ケアホーム ありがとう グループホーム

くにみね かな

発表者：介護職 國峯 加奈

2004年1月開設 木造2階建 18名定員  
平均介護度4.1 入居待ち100名越え  
家族ボランティア 6組登録

共用デイ、短期入所実施 各種加算算定  
2017年リビングオブザイヤーで最優秀賞受賞  
法人内に認知症介護指導者研修修了者17名

(取り組んだ課題・はじめに)

全国的に、認知症グループホーム(以下GHと略)入居者の重度化に伴い摂食嚥下障害をきたす者が増加している。

当GHでも、嚥下能力の低下や口腔状態の悪化などにより、とろみをつけた飲食物を摂取しているご利用者がいる。

ご利用者によって、トロミをつけた料理の中で良く食べてくれるものと食べてくれないものがあることが気になり、とろみの付け方によって、料理そのものの味が変わるのではないかと思い、ご利用者と職員とで、とろみの濃度や温度によって味や食感がどう変わるのかを調査したのでその結果を報告する。

(倫理的配慮)

発表に関し各入居者、施設長に許可を得ている

(調査概要)

ご利用者が日常よく口にされる飲食物を10種選出し、「トロミなし」「トロミ軽」「トロミ中」と温度の違い(冷、常、温)の3種類で味、食感の変化を職員3名、ご利用者1名の計4名で判断した。

## 1. 調査対象物

- (1) アクエリアス [飲物]
- (2) レモンティー [飲物]
- (3) インスタントコーヒー[飲物]
- (4) コーヒー[飲物]
- (5) 緑茶 [飲物]
- (6) 炭酸ジュース [飲物]
- (7) みそ汁 [飲物]
- (8) ご飯(普通、軽、中、かゆ軽、中) [食べ物]
- (9) カルピスウォーター [飲物]
- (10) 生姜湯 [飲物]

## 2. 判定者

- ・A氏 女性 86歳
- ・B氏 女性 45歳
- ・C氏 女性 25歳

・D氏 男性 32歳

## 3. 温度について

- ・冷たい (約 20 °C)
- ・常温 (約 35 °C)
- ・温かい (約 45 °C)

(結果)

各飲食物×とろみ×温度については以下の通り。  
(一部抜粋)

[インスタントコーヒー]

	トロミなし	トロミ軽	トロミ中
冷			
常			
温			

[インスタントコーヒー]

	トロミなし	トロミ軽	トロミ中
冷			
常			
温			

10種類入れることが難しかったため、多かった意見を抜粋し、報告させていただきます。

すべての結果に関しては発表の際に報告させていただきます。

個別感想 (一部抜粋)

- ・とろみがあると、より熱く感じ飲みにくい。
- ・あまり美味しくない。
- ・冷たくて美味しかった。
- ・口に到達するまで時間がかかり飲みにくい。
- ・美味しかった。

(考察)

- ・とろみの粘度・温度による味、食感の変化を考慮した食事の提供が必要と思われた。

## 食の多様性を考えた献立と調理の工夫

## ◆キーワード

- 1 食事
- 2 多様性
- 3 認知症予防

～認知症予防を目指した食事～

愛知県・江南市

ぐるーぷ ほーむ      じょいふる こうなん  
グループホーム      ジョイフル江南はしもと じゅんこ  
発表者：橋本 順子しょくいん いちどう  
共同研究者： 職員一同

愛知県の北東部に位置し、近くには、一級河川の木曽川が流れ温暖な気候・風土で静かに暮らせる最適な環境です。

1ユニット9名、女性9名、平均要介護1.89  
職員構成：8名 女性7名 男性1名  
平均年齢40代前半

(取り組んだ課題・はじめに)

・日常生活において、食事は重要な役割を担っており、ライフステージに応じて食事の量や質を工夫することになっている。

・認知機能や脳の容積が維持されている人は、色々な食品を食べていることが報告されており、食の多様性が脳の老化を防ぐカギとなることが分かっている。

・認知症予防や加齢に伴う心身機能の低下を遅らせるフレイル予防の観点から、良好な栄養状態の維持を図るために、食の多様性に注目した献立と調理の工夫について発表する。

(取り組み)

・食事を食品の多様性スコアにて食事内容を確認

10月1日～10月31日			
①肉	1点	⑥緑黄色野菜	1点
②魚介類	0点	⑦海藻類	0点
③卵	1点	⑧いも	0点
④大豆大豆製品	0点	⑨果物	1点
⑤牛乳	0点	⑩油を使った料理	1点
合計			5点

・管理栄養士による、勉強会の開催  
(食事バランスガイド使用し、献立作成の基本を学ぶ)

※1日10品目以上の食品を入れる。

食材の重複を控え、彩りを鮮やかにする。

・野菜の栄養を逃がさないコツを学ぶ。

(切り方や調理方法)

・食品の多様性スコア7点以上を目標とする。

(活動の成果と評価)

3月1日～3月31日			
①肉	1点	⑥緑黄色野菜	1点
②魚介類	1点	⑦海藻類	1点
③卵	1点	⑧いも	1点
④大豆大豆製品	1点	⑨果物	1点
⑤牛乳	1点	⑩油を使った料理	1点
合計			10点

・毎日、全品目を献立に加えることに成功し、食事バランスガイドに沿った献立作成が出来た。

・全職員、多職種の食材・栄養摂取への意識向上に繋がった。

(今後の課題・考察・まとめ)

・多様な食品摂取が、栄養素の摂取や筋量・身体機能の低下抑制に大きく関わることを学んだ。認知症予防には、食の多様性だけではなく、運動、睡眠、聴覚、視覚、社会参加など多くの因子の介入が有効であり、それらにも、着目し認知予防に取り組んでいきたい。

(参考・文献など)

・健康長寿の為の食事と栄養

東京都健康長寿医療センター研究所 横山友里氏

図1：食品摂取の多様性得点 参照

図2：食品摂取の多様性得点の特徴 参照

・厚生労働省、農林水産省

食事バランスガイド フードガイド(仮称) 検討会報告書 第一出版, 2005. 参照

## 嚥下低下の合併症状別による食事形態変更

## ◆キーワード

- 1 GHのご利用者
- 2 食事形態変更紹介
- 3 利用者の食事の支援

## GHご利用者での紹介

広島県 福山市

たきのうちいき

多機能地域ケアホーム ありがとう グループホーム

かめもと けいこ

発表者：介護職 亀本 桂子

2004年1月開設 木造2階建 18名定員  
平均介護度4.1 入居待ち100名越え  
家族ボランティア 6組登録

共用デイ、短期入所実施 各種加算算定  
2017年リビングオブザイヤーで最優秀賞受賞  
法人内に認知症介護指導者研修修了者17名

(取り組んだ課題・はじめに)

グループホームのご利用者は、高齢化が進み身体能力低下や認知症による嚥下低下によって、誤嚥のリスクが上がっている。

最近では、誤嚥性肺炎を発症するご利用者も見られかかりつけ医や施設内の訪問看護師に相談の元で食事形態の変更を行ったり、入院中にて言語聴覚士による検査などで食事形態の見直しが行われた。さらにGHでの工夫も行った事を紹介する。

(倫理的配慮)

発表に関して各入居者、施設長に許可を得ている

(利用者情報)

- ・A氏 要介護5 男性 86歳 ADL全介助
- ・B氏 要介護3 女性 98歳 ADL一部介助
- ・C氏 要介護4 女性 84歳 ADL全介助

(内容)

## 1) A氏について (体力低下+嚥下障害)

ミキサー食での提供、全介助で飲み込みよく摂取されていたが、持病のてんかんや認知症の進行などにより徐々に嚥下が低下しムセが増え食事の摂取が困難となる。

その後、誤嚥性肺炎発症しSPO<sub>2</sub>低下や酸素使用などもありターミナル期に移行となる。看護師・家族・介護士でのカンファレンスで体力低下者で摂食しやすいように食事形態見直し、一回の食事量減、一口量の見直しや使用するスプーンの変更し、脱水予防の為に水分摂取の時間を追加するなどの対応となった。

今回、食事形態の変更と工夫を行った事により、以前よりもムセが減り食事や水分を摂取できる事が増えてきた。水分はトータルで1L平均。

## 2) B氏について (咀嚼低下+嚥下障害)

食べる事が好きで食事は介助なく自力摂取できていたが、認知症の進行により食べこぼしがあった。また虫歯や加齢により口腔内環境も悪く咀嚼が十分にできていない可能性もあったがムセなく摂取できていた。徐々にムセが見られるようになり体調悪化した為かかりつけ医受診となる。診断の結果軽い誤嚥との事で主治医と相談し咀嚼低下者でも摂食しやすいようにミキサー食、水分にトロミ剤使用となりGHでは、水分のトロミ剤の量の統一を行う。

今回ミキサー食に変更した事により皿をそのまま口に持っていったり、混乱し不穏になる事や食欲低下などの様子が見られた為、主治医と相談の元さらに工夫していく。

## 3) C氏について (開口障害+嚥下障害)

以前は食事の際、口が開き全介助で摂取できていたが、低血圧や認知症の進行により徐々に口を開ける事が困難になった。開口トリガーポイントを探した結果唇を軽く刺激すると少し口が開く事がある。その後食事中に傾眠になる事や咀嚼中に発語がありムセが見られるようになる。発熱し主治医の指示にて血液検査行い、極度の貧血が判明。救急要請にて入院し誤嚥性肺炎も発症している為加療となる。言語聴覚士による嚥下検査によりミキサー食、水分にトロミ剤使用に変更となる。退院後、開口障害者でも摂食しやすいようにトロミ剤の量の統一と一口量の見直しや使用するスプーンの変更、食材の厚み調整、食事の際の姿勢に気をつけ介助を行う事とする。

現在では、ムセも少なく全量摂取でき元気に過ごされている。

(考察) 認知症の進行と加齢による口腔環境は徐々に変化する為、1人1人に合った食事形態の見直しが必要。その為、専門職と連携し日々の生活の様子を観察しながら考慮していく事が大事である。

# 食事のすばらしさをもう一度取り戻す為の取り組み

## ◆キーワード

- 1 グループホームケア
- 2 認知症ケア
- 3 センター・パートナーケア

認知症による食欲低下への取り組み

兵庫県・明石市

株式会社<sup>かぶしきがいしゃ</sup>ハートケア グループホーム<sup>あかし</sup>ふれあい明石発表者：<sup>かんりしや</sup>管理者・<sup>たけもと</sup>竹本 <sup>しゅうへい</sup>修平共同研究者：<sup>しゅにん</sup>主任・<sup>いのした</sup>井ノ下 <sup>ともみ</sup>朋美

認知症対応型共同生活介護

平成21年3月開設 2ユニット 定員18名

当社理念

「より良い地域福祉のため、高度な倫理観を以て地域社会に貢献する」

(取り組んだ課題・はじめに)

認知症の影響と思われる認識力の低下によって、食事自体を認識することが難しくなっておられる入居者様がおられます。ご本人様からの発語はほぼなく食事についての聞き取りもできず、食事も認識することが難しくなり、徐々に食事が低下してしまっている状況を改善するために、食事の内容や本人様の好みなどの情報を収集しながら食事量の改善に繋がる取り組みを行いました。ご自身から食事を召し上がることはなくなっておられるため食事介助を行っておりますが、おやつはどんなものでも召し上がり、それは固いものであっても手に持って召し上がられることが分かりました。しかし普段の食事になると口の動きが止まってしまう。その入居者様が普段の食事をどうすれば「ご自身で」「楽しく」召し上がって頂けるか、そして、おやつだけではなく、食事も「美味しい」と感じてもらえるような取り組みを行いました。

(倫理的配慮)

研究発表を行う上で関係者各位に了承を得、入居者様の個人情報とプライバシーの保護の観点から個人情報を匿名化することで実施しました。

(具体的な取り組み)

- ①入居者様のADLの再確認、食事のアセスメントの実施。どうすればご自身で召し上がる事が出来るのかを検討する。
- ②食事内容(献立)による食事量の変化の分析。ご本人様がよく召し上がる食事内容を分析し、味の趣向を把握した上で何を食べたら咀嚼が止まるのか、何を食べたら咀嚼が進むのかなど観察しました。咀嚼が止まった際、どのようにしたら、何を口にしたら咀嚼が再開するかも観察しました。
- ③分析した内容をもとに仮説を立てて、本人様への食事の提供方法を変更しました。味の趣向を分析する中で気が付いたことは「お酢」の味付けがあるときは食事が進むことに気が付きました。酢飯や酢の物などは口を開けてしっかりと召し上がられることが分かったため、お酢の味付けのものをお口に運ぶ順番の中に取り入れれば食事量が上がるのではない

かと仮説を立て実施しました。

(活動の成果と評価)

①については、まず咀嚼に対して義歯ではあるものの硬い物も咀嚼でき、嚥下の状態も問題ないことが分かりました。そして自身で食べる意識を持っていたかのようにするため、出来る限り食器やお箸など手に持っていただき「食事」という行動を行っていると認識を持っていただくようにアプローチしました。ご自身では握力の問題で持つことが出来ませんが職員が手を添えて一緒に食器を持っていただくこととしましたが、食事が進む時、進まない時が見られました。

②食事に関しては、メインの食事と白米を交互に食事介助を行うと食事途中から咀嚼が止まり、水分も取れず口の中に食物がとどまり、唾液も飲み込まれなくなる状況でした。しかし酢飯や酢の物などは口を開けてしっかりと召し上がられることが分かり、止まっていた咀嚼を酢の物をお口に運ぶことで咀嚼が再開することがあることに気が付きました。

③お酢の味付けのものを下記のサイクルで取り入れて召し上がっていただきました。

1. お茶 → 2. 酢の物 → 3. 白米 → 4. 酢の物 → 5. メイン料理 → 6. 白米 → 1. お茶

以上のサイクルで食事介助を行った結果、食事量が劇的に改善されました。この方にとっての一番の改善点は「お酢」であることが分かりました。

(今後の課題・考察・まとめ)

この方については「お酢」という趣向がポイントでしたが、他の方が同じ趣向であるわけでは当然ありません。お一人お一人の身体状況や好み、その方に合わせた介助内容に気づき、職員同士で日々意見や情報の交換することが生活の質を向上するアプローチに必要なことと考えます。入居者様にとって施設は住処です。食べたい時、寝たい時、その人のペースに合わせる事が大事だと考えます。食べるという大事なことも家に居ればいろんな味を楽しんでいたと思います。その手助けができるのは、職員であることをこの度の研究で再確認しました。